

ヒバの樹種特性と遠野での天然生林再生に向けた取り組み

1 ヒバとは

ヒバはヒノキ科の常緑針葉樹で、青森県や新潟県佐渡島に多く分布するほか、東北各地にも点在しています。ヒバの[※]基本種はアスナロとい、こちらは青森県から鹿児島県まで分布しており、富山県や石川県ではアテという名で知られています。ヒバの仲間が地方名が多くてややこしいのですが、表1をみたら少し整理できるのではないかと思います。ヒバの葉はヒノキの葉を厚ぼったくした感じでヒノキとの違いはすぐわかります(写真1)。ヒバとアスナロは球果の形が違う(アスナロの球果は突起がある)らしいのですが葉では見分けがつかえません。ヒバの材は防菌成分を持つヒノキチオールを多く含むため耐久性が高く、建築材や風呂桶、外装材に使われます。神社仏閣など大径で耐久性の高い材が必要ところはヒバが活躍する場になっていきます。青森県はヒバの一大生産地で、木材を大量に産出していますが、現在は生産量が減り、択伐や間伐による材がわずかに出て

くるだけです。まれに植林されますが、成長が遅いため、材がとれるようになるまで長い時間がかかります。

表1. ヒバとアスナロの違い

和名	学名	分布	形態	別名
アスナロ	<i>Thujopsis dolabrata</i>	青森 ～鹿児島	球果に突起がある	アテ (富山・石川)
ヒバ	<i>Thujopsis dolabrata</i> var. <i>hondae</i>	北海道南部 ～栃木	球果は丸い	ヒノキアスナロ [※]

※こちらの方が標準和名ですが、本稿では東北で普通に使われる「ヒバ」を採用しています



写真1 ヒバの葉

※分類学で変種などの基本となる種のこと。表1でヒバの学名にある[※]は変種であることを示しています

2 天然更新で木材生産できるヒバ林

ヒバは日本産の針葉樹の中で、天然更新により持続的に木材を生産できる唯一の樹種といっても過言ではありません。その理由として、ヒバは耐陰性が高く、伏条更新することが挙げられます。ヒバは非常に耐陰性が強く、かなり暗い林内でも稚樹が生き延びることができます。他の



樹種なら枯れてしまうところを何年も、時には何十年も耐え忍び、択伐等で明るくなったときに成長することができます。もう一つの特徴である伏条更新は日本海側のスギでも見られる更新の様式で、積雪期に細い枝が地面に押しつけられて根が生え、無性的に個体数が増えます。森林総合研究所東北支所は青森県内の国有林に設置した試験地で90年以上にわたり調査を続けていますが、試験地ではこれまでに5回択伐を行いおよそ800m³/haの木材を生産してきました。2020年時点の材積が523m³/haなので、林分構造(ここでは幹の太さごとの本数割合)は大きく変わらないまま、現存材積をはるかに超える量の材を生産してきたことになりました。簡単に書いてしまいましたが、これを実行するには生産者(管理者)の高度な選木技術と伐出技術が必要になります。下北森林管理署の大畑ヒバ施業実験林では、施業区を20ブロックに分割して毎年計画的に択伐を進め、皆伐によるないヒバ林施業を実践しています。

3 岩手県内のヒバ生育地

青森県を中心に分布するヒバですが、岩手県にも分布する場所があります。早池峰山周辺(宮古市、遠野



写真2 平蔵沢ヒバ人工林、太い木に混じり細い後継木も育っている



写真3 試験地におけるヒバの稚樹調査

市)、雫石町の秋田県境寄り、五葉山周辺(釜石市など)にみられます。昨年のNHK朝ドラ「おかえりモネ」の序盤でヒバの話が出てきましたが、ドラマの舞台になった登米市には実はヒバの天然分布はなく、植えられたヒバが五葉山あたりのヒバをモデルにしたのかもしれない。それはさておき、このように点在するヒバは古い時代にはもつと面的に分布していたはず。しかし、氷

期から間氷期にかけての気候変動により現在のように飛び地的に分布するようになったと考えられます。天然生ではありませんが、岩手県滝沢市には1840年代に植栽されたという平蔵沢ヒバ人工林があり、2019年には「林業遺産」に選定されています。人工林といっても180年生にもなると見た目は天然生林と変わりなく、更新木もみられます(写真2)。

※一般社団法人日本森林学会が毎年選定する、林業の歴史を示す特徴的な景観、施設、技術、道具類、古文書などのこと

4 ヒバ天然林再生への取り組み
岩手南部森林管理署遠野支署と森林総合研究所東北支所は2020年に協定を結び、ヒバ天然生林の再生に向けて、国有林に試験地を設置しました。ここはもともとカラマツ植林地でしたが、大きいヒバが単木的に存在し、場所によっては群状に分

布し、林床には伏条更新と思われる稚樹パッチがみられました。今のところヒバ林としては分断化され規模が小さいのですが、今後カラマツなどを間伐し光環境を改善することによってヒバ林を再生することを目指しています。まずは面積150×600mの調査プロットを4か所設置し、毎木調査とヒバの稚樹調査を始めました(写真3)。ヒバ成木の本数は場所によってまちまちで、伏条更新による稚樹の分布にも大きな偏りがありました。今後は林床の光環境をモニタリングしつつ択伐を実施し、ヒバの成木や稚樹の成長を地道に追跡していく予定です。不安材料としては、遠野支署管内でも二ホンジカの増加が著しく、稚樹や樹皮に対する被害が懸念されます。今のところ大きな被害は見られませんが、調査を続けながら注視していきます。

森林総合研究所東北支所

酒井 敦

019(641)2150

【参考文献】

森林総合研究所東北支所「Forest Winds」
[No.21] [No.41]
https://www.fpri.affrc.go.jp/thk/research/publication/thk/forest_winds.html